
みなみけ おかわり 吉野のおはなし

AKASAKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みなみけ おかわり 吉野のおはなし

【Nコード】

N8129V

【作者名】

AKASAKA

【あらすじ】

この物語は吉野の平凡な日常を淡々と描くものです、過度な期待はしないでね。

E p i s o d e o (前 書 ぎ)

初心に戻ること大切かな

Episode

三連休を利用したキャンプも無事に終わった。

色々あったけど、楽しかったなあ．．．と吉野は一人考えていた。

帰りの車内は運転手のタケル以外皆寝ているようで学生組でおきているのは吉野だけだった。

「にしても、夏奈ちゃんって本当にかわいいなあ」

一人だけ座布団を独占しながら寝ている夏奈を見ながら吉野はつぶやく。

わたしは皆を起こさないように移動して夏奈ちゃんの隣にすわった。

あ、よだれたらしてるw

そっとハンカチでヨダレを拭いてあげた。

そのとき、くすぐたかったのかちよつと口元が緩んだ。

それを見て私もおかしくなってくる。

普段はあんなに元気なのに寝ちゃうところも静かになっちゃっただよね。

そういう夏奈ちゃんが本当に大好き。

それは、藤岡君にだって負けないくらいに。

でも、私もまた夏奈ちゃんに思いを『正しく』伝えることはできなかった。

でも、そういう鈍感な夏奈ちゃんも好き。

ちょっと、眠くなってきたので夏奈ちゃんの背中に寄り添うようにして寝てみる。

夏奈ちゃんっていい匂い。

ちょっと変態さんみたいかな？

そんなことを考えているうちに私はいつしか眠りについていた。

Episode (後書き)

こんどこそみなみけです。

Episode 1 (前書き)

今夜は暑い！

Episode 1

「吉野、もっと強くしていいか？」

「あ……いいよ。夏奈ちゃんだったら」

「わかった。じゃ、行くぞ……」

「あ……そこは……だめえ……」

「お前らなにやってんだ？」

千秋が来たのでとりあえず夏奈ちゃんは私の上から撤退した。

もう、せつかく夏奈ちゃんと『マッサージ師ごっこ』をしていたところなのに……

なんでも、昨日見たテレビでマッサージ師の特集がやっていたらしくそれではまったらしい。

夏奈ちゃんてば、こないだは指圧にはまってたばかりなのに。

「今から私と春香お姉さまは買い物に行くが吉野は行くか？」

「うんとね……」

「おーい、どうして私に一番で聞かないんだよー」

千秋から疎まれてる夏奈ちゃんもなかなかかわいいよね。

「お前は留守番だ。」

夏奈ちゃんが留守番なら、私はもちろんSTAYだよ！

「私も留守番でいいよ。」

「おお、吉野。お前は分かってくれてるよ。」

そういいながら夏奈ちゃんは私を後ろから抱きしめてくる。

「ちょ……夏奈ちゃん¥¥¥¥¥¥¥¥」

これは予想してなかった。

あ、夏奈ちゃんが私を……すっごい匂いがするし、胸が少しあたってノノノノこれはイイ！

「まあ、吉野がそういうなら。夏奈、吉野に変なことするなよ」

（いいよ、夏奈ちゃん。むしろ、どんどんしてよー！）

そういって、千秋は春香ちゃんと出かけていった。

よしっ。これで2人きりだよ。

「あれ……KNちゃん？」

おかしいな、さつきまで私の後ろにいたんだけど……

「おーい、吉野。お風呂入るつよ」

なんだ、お風呂場にいるのか……え？お風呂？一緒に入るって事？

「早く来いよ。気持ちいいぞー。」

「う、うん。今行くねーー」（迫真）

脱衣所に行くと、夏奈ちゃんの着ていたと思しきTシャツやズボン……パンツが落ちていた。

こ、れはま、さか……KNちゃんの脱ぎたて……

浴室からはKNちゃんのよくわからない鼻歌が聞こえてくる。

これは……『行く』べきなの？

いいや、ダメよ私。これは変態さんのすることだよ！だめ……だよ？

結局、なにもしないまま私はKNちゃんの衣類をたたんでおいて、自分も脱いで横に並べた。

浴室

「おー、遅かったな」

「う、うん。ちょっと考え事。」

「そっかー。さっきのマッサージで汗かいただろ？」

「そだねー」

私はとりあえず、体を洗うために蛇口からぬるま湯を出す。

ここで、私は一つ疑問に思うことがあった。

KNちゃんいま、湯船にいるけど、私が入るときどうするんだろ？

大きさ的には2人で入るには十分だけど……2人で!?

待ってよ、二人で入るって事は……ことは……体と体が……結構触れ合う。。。。

これは……最高だよ!

速攻で体を洗い、私は湯船へと向かう。

「えーと、私どうしようか？」

「ほら、半分あけるからそっちに入りなよ」

「おっけー」(棒)

私はゆっくりと湯船に入りKNちゃんと向かい合うようにして座る。

湯船の中では夏奈ちゃんのほうが足が長いのですこし動かすだけでお互いにあたってしまふ。

「あっ……ごめん。」

「ううん、だいじょうぶ¥¥¥¥」

「すごいよ。。。KNちゃんの足ってすごいスベスベだあ。。

「吉野、大丈夫か？顔がちよつと赤いんじゃないか？」

「え……大丈夫だよ／＼」

「いいや、たぶんのぼせてるんだよ。ほら、もうあがる？」

そういつてKNちゃんは立ち上がって私の手をとる。

「いや……ほ……んとにだ……」

私の意識はそこで終わった。

Episode 1 (後書き)

僕はお風呂よりshower派です。

Episode 2 (前書き)

しなみぎドロップ見ながら考えた。

Episode 2

『よしの。。。。よしの』

あれ？KNちゃんの声が聞こえる。。。。

『起きる。。。。吉野』

起きる？。。。私寝てたっけ？

というか、ここどこ？

なんか暗いんだけど。。。。

そもそも、私って何してたんだっけ？

え~~~~と。。。。あ！お風呂！

KNちゃんとお風呂に入ってたんだよ！

そうそう、それで一緒に湯船につかって。。。。どうしたんだっけ？

『吉野！。。。吉野！』

あ、KNちゃんの声がだんだん大きく。。。。

「吉野！」

「……………ん？……………うわっ…KNちゃんどうしたの！？」

KNちゃんの目は赤くはれていた。

「どうしたって、お風呂入ってたら急に吉野がぶつたおれて…
心配したんだぞ！」

「そうだ、私KNちゃんとお風呂入ってるときに倒れちゃって…
…というか…」

KNちゃんに『心配したんだぞ』って言われちゃったよ〜〜。

普段は元気一杯なのに…これがギャップ萌えなのかな？

「ごめんね、心配掛けちゃって。もう元気だから、泣かないでね
？」

私は起き上がってKNちゃんの頭をなでなでする。

「バカッ！泣いてなんか…ないもん」

「うっ……………今の台詞、破壊力が…これがKNちゃん
の本気なのね…」

「はいはい。」

そう言いつつ、どさくさにまぎれて私はKNちゃんを抱き寄せる。

「ごめんね、吉野……………」

今日は豊作やわく……………ってあたし何を言ってるの？

「かなちゃん……………」

この様子だと本気で焦って心配していたみたい……………

夏奈ちゃんのごういとうところが好き。

そう考えると、自然と抱きしめる力が強くなる。

ちらっと見えたKNちゃんの泣き顔がハンパなかった。

鼻血でそう……………

千秋たちが帰ってくると夏奈ちゃんは目をごしごししながら立ち上がって、

「今日のことは2人だけの秘密な」

と言って、ドタドタと玄関まで走っていった。

そのときにはもう、いつものKNちゃんに戻ってた。

Episode 2 (後書き)

まだ三話目なのに一日のアクセス数がストパンに勝っているだど
!?

まあ、たいした数じゃないけどねw

Episode 3

『お風呂事件』から数日が経ったある休日のこと。私は暇をもてあましていた。

「あー、夏奈ちゃんに会いたいなあ」

この3日ですでに私の夏奈ちゃん分はかなり不足していた。

だったら、みなみけへ遊びに行けばいいじゃないかと思うかもしれないけど、やっぱり『あの事件』のことを思い出すとちょっと行きづらくなる。

別に、あのことが春香ちゃんや千秋にはれた訳じゃないのだけじゃ。

「あんときの、KNちゃんかわいかったな」

『心配したんだぞ!』

『バカッ！泣いてなんか・・・ないもん』

この二つの名言が飛び出したときにはさすがのあたしも理性が飛びそうになりました、いや本当に。

そして最後に、

『今日のことは2人だけの秘密な』

だってよ~~~~!

もう、これはかなり威力がやばかったね。というか危機でした

(汗)

「もうー、何か思い出してたりますますあいたくなってくるよ・

」

気分転換に、本でも読もうかな。

そう思い、私はベッドから起き上がり、本棚へと向かう。

「やっぱり、こういうときは……『未来日記』でいつか

適当な巻を一冊取り出して、再びベッドで横になりながら読み始める。

この漫画、内田に薦められて勢いで12巻まで買ってしまっただけ後悔してたけどまじめに読んでみると結構面白かったので、一日で読み終えてしまった。

特に、主人公の彼女?である、ヒロインには衝撃を受けた。容姿端麗、学業優秀、という完璧超人な彼女だがじつは超ストーカー。主人公のためならなんでもする(良い意味でも悪い意味でも)その姿に私は少しあこがれた。

「まあ、流石に夏奈ちゃんを監禁しようだなんて思わないけどね・
……たぶん」

漫画を読み始めたのはいいけど、正直言って、一度読んだ漫画やラノベってあんまり読みたくないんだよね。そういうわけで、私は半分ほど読み終えたあたりで読書を中止した。

壁に掛けてある時計を見ると、時刻は11:45だった。

「そういえば、今日お母さんにお昼ご飯は買って食べなさいって言われてたっけ」

いつまでも、引きこもっているわけには行かないのでとりあえず、昼食を買いに外へ出ることにした。

「近所のミニストップでいいかな」

最近できた近所のMSに行くことにした。あまりみかけないので近所にあるのはちょっと嬉しかったりする。Xポテトがお気に入り。

「いらっしやいませー」

店内に入るといつも見かけるバイトの女の子が元気良く挨拶をしてくれた。お昼が近いこともあってか中にはたくさんの方がいた。

とりあえず、買うものは決まっているのでそれらの在庫が十分あることを確認して、雑誌コーナーのほうへ行く。あ、今週の彼岸島まだ読んでないや。

60分ほどかけて週刊誌をチェックし終わると、客の数がまばらになり始めていたので買い物を再会することにした。

「あとは、お菓子・・・あっ！」

最後にお菓子を買おうとして売り場へと向かうとそこにはなんと夏奈ちゃんがいた。

「おー、ヨシノじゃないか。」

しかも、速攻気づいてもらえたよ〜！

落ち着け私、ここはあくまでも平静を装って

「あ夏奈ちゃんだ、どうしたのこんなところまで」

夏奈ちゃんの家とは方向が違出し距離もあるからこんな近所では会うことはまずない。

「それがさー、最近ここにMSができたってマキちゃんから聞いたんだ。それで、今イカ娘のフェアがやってるらしくてさ、景品目当てにここまで来たんだよ。」

これは意外！まさか、夏奈ちゃんがイカ娘が好きだったとは。

幸い私もイカ娘は全部見てるし、漫画も買ってあるから知識は完璧だ。

「へー、夏奈ちゃんもイカちゃん好きだったんだ」

「おー！吉野もか！」

「うん、夏奈ちゃんほどの景品にするの」

「私はクリアファイルかな。学校でも使えるし。」

学校にアニメのクリアファイルもって行く夏奈ちゃんまじ天使だよ（恍惚）

ついでに私もなにか買おつと。

「そっかー、じゃ私はこっちのフェイスタオルにしようかな」

そんなわけで、2人で仲良くイカ娘のグッズを買うことにした。

帰り道。

「じゃあ吉野はお昼一人なのか」

「うん。」

店を出た後もすぐには帰らないで、近くの公園でおしゃべりをすることにした。

遊具も少ない小さな公園なので人は私たち意外いなかった。

つまり、2人つきりだよー！！

「そうなのか………。なあ吉野」

ちよつと夏奈ちゃんの声が真剣になったのに気づいた。

なんか緊張してきた。

「ちょうど私もいま家で一人なんだよ・・・だからさ・・・」

いつも言いたいことはズバツと喋ってしまうのに今の夏奈ちゃん
はなんだかすっごくモジモジしてて、かわいい。まるで、恋する男
の子が好きな女の子に話しかけるような感じだ。

らしくないあとと思って言葉を待っている、思春期の男子学生よ
ろしく私のほうを見ずに頭をポリポリとかきながらあさってのほう
を見てこう言い放った。

「だから・・・そのー・・・なんだ・・・今からウチに来ないか」

そのときの夏奈ちゃんの顔は今までに見たこと無いくらい、真っ
赤だったのはヒミツにしておこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129v/>

みなみけ おかわり 吉野のおはなし

2011年12月29日12時48分発行